

漢方の臨床

Journal of Kampo Medicine

Published by The Association of East-Asian Medicine

2

第70巻・第2号

2023

〔主な内容〕

〔口絵〕 目でみる漢方史料館(434)	小曾戸 洋	158
巻頭言	金 成俊	167
療養病院に於ける「厥陰病期」の最期の一言	加藤広美 他	169
医師・薬剤師リレー治験録(211)	飯田敏雄 他	179
東京医大漢方医学センターだより(21)	及川哲郎 他	183
飯塚病院 月曜カンファレンス 臨床経験報告会より ^⑬	吉永 亮 他	191
新 女子医大雑話(10)	磯村知子 他	197
東洋堂経験余話(356)	松本 一男	210
漢方牛歩録(408)	中村 謙介	214
現代医学の中での漢方治療 ―咳・痰・喘息に対して―	井上淳子 他	217
漢方研究室(60) 2022年12月号出題 第60問(再掲)	新井 信	227
張仲景以前の中国医療(12)	真柳 誠	235
一気留滞論における気と万病一毒論における気 ～気と東洋医学の基本概念に関する考察～	鈴木 斉観	243
新年のことは(続)	二宮 文乃	247

卷頭言

『古訓医伝』

横浜薬科大学
 金^{きむ} 成^{そん} 俊^{じゅん}

本書に関して、「宇津木昆台の著になる『傷寒論』『金匱要略』の解説書。(中略)①『医学警悟』六卷(『傷寒論』『金匱要略』の総論)、②『風寒熱病方経篇』七卷(『傷寒論』の註解)、③『風寒熱病方緯篇』七卷(『金匱要略』の註解)、④『薬能方法弁』五卷(古方で用いられる薬物の薬能解説)の四部よりなる」と解説されている(『日本漢方典籍辞典』より)。

本書は昭和四十七年に盛文堂より復刻され、『医学警悟』一卷に、「古訓医伝の完全復刻に寄せて」の文があり、「昭和十年八月十七日とあるから、いまから三十七年も前の盛夏の一夜、当時本郷真砂町にあった龍野一雄氏宅に、大塚敬節、木村長久両氏と私の四人が集合し、『古訓医伝』を読む会」というのを催した。このときの話題は、気賀林一氏が速記をして、『漢方と漢薬』誌第

2巻9号と10号に、二回に亘って連載されている。この記事は期せずして、『漢方と漢薬』の座談会記録掲載の尖端を切ったものとなり、当時日本の漢方界を代表する月刊誌が、座談会の第一番にとりあげたのがこの宇津木昆台著『古訓医伝』で、漢方研究家にとって特筆されるべき大著述である。(後略)、昭和四十七年六月十七日



(古訓医傳を讀む會) 於龍野氏(於龍野氏)
 向テ右ヨリ龍野・大塚・矢野・木村諸氏

図 『漢方と漢薬』第2巻第10号より

東洋堂経験余話

(356)

▽原因不明の夜間の寝汗と悪寒に芍薬甘草附子湯

▽夜間になると腹が張る人に厚朴生姜半夏甘草人参湯

東洋堂医院院長 松本一男

(710) 原因不明の夜間の寝汗と悪寒に芍薬甘草附子湯

患者は77歳の男性。

初診日は、X年6月7日。

既往歴は、50歳代に腎炎。62歳時に緑内障。67歳時に前立腺肥大で前立腺摘出。70歳時に右肺癌で1/3を摘出。

主訴は、1年ほど前から、特に今年に入ってから夜中の寝汗がひどく、夜中に4〜5回シャツを取り換える。そのたびに着替えに時間がかかり、上半身が冷えて悪寒がする。そのたびに頻尿で小便もする。またシャツを取り換えるのに時間がかかり、夜、寝不足になる。最近、甲状腺の検査を行ったが、異常はなかった。小便の出る量も、夜中に多

い。その他の症状としては――肩や頂部が凝る。口渇が少しある。腰痛がある。疲れ易い。

食欲は普通で、なんでも食べる。大便は下剤を服用しても3〜4日に1行。小便は前記。睡眠も前記。嗜好品は、コーヒー1日1杯を飲む。タバコは以前は吸っていたが、現在は吸っていない。

現在は吸っていない。

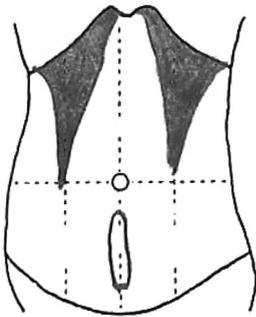
体格は中肉で中背タイプ。

血色も皮膚の艶も普通。

身長170cm。体重64kg。平

熱36・0℃。

診察すると、脈診は沈にして微。舌を診ると、湿潤して、白苔と中等度の菌痕、



漢方牛歩録

(408)

頸腕症候群・貧血に当帰芍薬散
変形性頸椎症にプレガバリン

千葉古方漢方研究会 中村謙介

頸腕症候群・貧血に当帰芍薬散

【症例】 31歳、女性。

【初診】 X年12月12日。

【主訴】 左肩甲部痛。

影の薄いと云った感じの生気の乏しい瘦せた色白の女性。2日前の起床時に寝返りをうったら、首でピシッと音がして発症したと云う。左肩甲部痛の他に両下肢が重く突っ張りそのために歩行が遅くなるとのことだが、腱反射など神経学的には異常はなさそう。頸椎のレントゲンも異常なし。理学療法と外用薬で治療を開始した。

2週後。肩甲部痛は軽減し、下肢のツツパリ感も軽くなった。しかし今度は立ちくらみがあり某医でメリスロ

ン、メチコバル、アデホスコワ、プリンペランが処方されていると云う。目眩では失神したこともあり、大きな子宮筋腫があつて脚が冷えるとのこと。

血圧108/74 mmHg。腹力わずかに低下し両腹直筋の軽度の緊張と、両下腹部に圧痛がある。当帰芍薬散エキス（9g/日分三）を処方した。これが年余にわたって続服することになった始めである。

さらに2週後。血圧は変わらないが立ちくらみが少なくなっていると云う。本人は本方の効果を実感したらしい。汗ばむ程度の軽い運動を勧めた。

薬が美味しいと云い、歩行を意識的に増やし、階段の昇降を積極的に行っている。

X+1年2月27日。左耳の突発性難聴を發し某医でステ